

礎

世阿弥作

前

ワキ 夫

ツレ 夕霧

シテ 妻

後

ワキ 前に同じ

シテ 妻の亡霊

地は 筑前

季は 秋

ワキ詞

「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。仮初の在京と存じ候へども。当年三歳に為りて候。あまりに故郷の事心もとなく候ふ程に。めしつかひ候ふ夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。いかに夕霧。あまりに故郷心もとなく候ふ程に。おことを下し候ふべし。此年の暮には必下るべき由心得て申し候へ。

ツレ詞

「さらばやがて下り候ふべし。かならず此年の暮には御下りあらうずるにて候。

道行

「此程の。旅の衣の日も添ひて。く。いく夕暮の宿ならん。夢も数そふ仮枕。明かし暮らして程もなく。蘆屋の里につきにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。蘆屋の里に着きて候。やがて案内を申さうずるにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由御申し候へ。

シテサシ

「夫れ鴛鴦の衾の下には。立ち去る思ひを悲しみ。

比目の枕の上には。波を隔つる愁ひ有り。まして
や深き妹脊の中。同じ世をだに忍草。我は忘れぬ
音を泣きて。袖にあまれる涙の雨の。晴間まれな
る心かな。

ツレ詞 「夕霧が参りたる由それく御申し候へ。

シテ詞 「何夕霧と申すか。人までもあるまじ此方へ来り候
へ。いかに夕霧めづらしながら恨めしや。人こそ
変はり果て給ふとも。風の行方のたよりにも。な

どや音づれ無かりけるぞ。

ツレ 「さん候とくにも参りたくは候ひつれども。御宮づ
かひの隙も無くて。心より外に三年まで。都にこ
そは候ひしが。

シテ 「なに都ずまひを心の外とや。思ひやれ実には都の
花ざかり。なぐさみ多きをりくにだに。憂きは
心の習ひぞかし。

下歌 「鄙の住居に秋の暮れ。人目も草もかれぐの。契

りも絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ。

上歌

「三年の秋の夢ならば。く。憂きは其まゝ覚めも
せで。思出は身に残り。昔はかはり跡もなし。実
にや偽りの。なき世なりせば如何ばかり。人の言
の葉うれしからん。愚の心やな。愚なりける頼み
かな。

シテ詞

「あら不思議や。何やらんあなたに当つて物音の聞
え候。あれは何にて候ふぞ。

ツレ詞

「あれは里人の碓打つ音にて候。

シテ

「げにや我身の憂きまゝに。古事の思ひ出でられて
候ふぞや。唐に蘇武といひし人。胡国とやらんに
捨ておかれしに。故郷にとゞめおきし妻や子。夜
寒の寢覚を思ひやり。高楼に登つて碓を打つ。志
の末通りけるか。万里の外なる蘇武が旅寢に。故
郷の碓聞えしとなり。妾も思ひや慰むと。とても
さびしきくれはとり。綾の衣を碓に打ちて。心を

慰まばやと思ひ候。

ツレ「いや礎などは賤しき者の業にてこそ候へ。さりながら御心なぐさめん為めにて候はゞ。礎をこしらへて参らせ候ふべし。

シテ「いざ／＼礎打たんとて。馴れて臥猪の床の上。

ツレ「涙かたしく狭筵に。

シテ「思ひをのぶる便りぞと。

ツレ「夕霧立ちより諸共に。

シテ「恨みの礎。

ツレ「打つとかや。

地次第「衣に落つる松の声。衣に落ちて松の声。夜寒を風や知らずらん。

シテ一声「音づれの。稀なる中の秋風に。

地「憂きを知らする夕べかな。

シテ「遠里人もながむらん。

地「誰が世と月はよも訪はじ。

シテサシ
「面白の折からや。頃しも秋の夕つ方。」

地
「牡鹿の声も心凄く。見ぬ山風を送りきて。梢は何れ一葉ちる。空すさましき月影の。軒の忍ぶに移ろひて。」

シテ
「露の玉垂かゝる身の。」

地
「思をのぶる夜すがらかな。宮漏高く立ちて風北に廻り。」

シテ
「隣砧緩く急にして月西に流る。」

地
「蘇武が旅寝は北の国。是は東の空なれば。西より来る秋の風の。吹き送れと。間遠の衣打たうよ。」

地
「故郷の。軒端の松も心せよ。己が枝々に。嵐の音を残すなよ。今の砧の声そへて。君がそなたに吹けや風。余りに吹きて松風よ。わが心。通ひて人に見ゆならば。其夢を破るな。破れて後は此衣。誰か来ても訪ふべき。来て訪ふならばいつまでも。衣は裁ちも更へなん。夏衣。うすき契りは忌まは

しや。君が命は長き夜の。月にはとても寝られぬ
に。いざ／＼衣打たうよ。彼七夕の契りには。一
夜ばかりの狩衣。天の河波立ち隔て。逢ふ瀬かひ
なき浮舟の。梶の葉もろき露なみだ。二つの袖や
しをるらん。水陰草ならば。波うち寄せようた
かた。

シテ「文月七日の暁や。

地「八月九月。実にまさに長き夜。千声万声の。憂

きを人に知らせばや。月の色風のけしき。影にお
く霜までも。心すごき折ふしに。礎の音夜嵐。
かなしみの声虫の音。まじりて落つる露涙。ほろ
／＼はらく／＼と。いづれ礎の音やらん。

ツレ詞

「いかに申し候。都より人の参りて候ふが。此年の
暮にも御下りあるまじきにて候。

シテ

「恨めしやせめては年の暮をこそ。偽りながら待ち
つるに。さては、や誠に変はり果て給ふぞや。

下歌地 「思はじと思ふ心も弱るかな。

上歌 「声も枯野の虫の音の。乱るゝ草の花心。風狂じた
る心地して。病の床に伏し沈み。つひに空しくな
りにけり。く。 (中入)

ワキ詞 「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み。引き別れにし妻
琴の。つひの別れとなりけるぞや。

歌 「さきだゝぬ。悔の八千度百夜草。悔の八千度百夜
草の。陰よりも二度。帰りくる道と聞くからに。

梓の弓の裏弭に。言葉をかはすあはれさよ。く。

後ジテ 「三瀬川。沈みはてにしうたかたの。あはれはかな
き身のゆくへかな。標梅花の光りを並べては。娑
婆の春をあらはし。

地 「跡のしるべの灯は。

シテ 「真如の秋の月を見する。さりながら我は邪姪の業
ふかき。思ひの煙の立居だに。安からざりし報い
の罪の。乱るゝ心のいと責めて。獄卒阿防羅刹の。

標の数のひまもなく。打てやくくと報いの礎。恨
めしかりける因果の妄執。

歌「因果の妄執の思ひの涙。礎にかゝれば。涙はかへ
つて火焰と為つて。胸の煙の焰にむせば。叫べ
ど声が出でばこそ。礎も音なく松風も聞えず。呵
責の声のみ恐ろしや。

歌「羊のあゆみ隙の駒。く。うつりゆくなる六つの
道。因果の小車の。火宅の門を出でざれば。めぐ

りめぐれども。生死の海は離るまじや。あぢきな
の浮世や。

シテ「恨みは葛の葉の。

地「恨みは葛の葉の。帰りかねて執心の面影の。恥か
しや思夫の。二世と契りてもなほ。末の松山千代
までと。かけし頼みはあだ波の。あらよしなや空
言や。そもかゝる人の心か。

シテ「鳥てふ。大をそ鳥も心して。

地「うつし人とは誰かいふ。草木も時を知り。鳥獣も心あるや。げにまこと喩へつる。蘇武は旅雁に文を付け。万里の南国に至りしも。契りの深き志。浅からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕。夜寒の衣うつゝとも。夢ともせめてなど。思ひ知らずや恨めしや。

地「法華読誦の力にて。く。幽霊まさに成仏の。道明らかになりけり。是も思へば仮初に。打ちし

礎の声の内。開くる法の花心。菩提の種となりけり。く。